



学園めすぬ
北園哲也
秋元書房 (文庫)
(9 / 5 刊・¥320)

テレバシー能力を持つ少女、別人にすりかわった先生、次々と消えていく級友——実はインベーダーの侵略の魔の手が……と、どれもこれもどこかで聞いたようなモチーフばかり。主人公は中学生、眉村流の学園物とよく似た雰囲気なのだが、ベッドシーンやその類の描写が妙にしつこくあったりして、どういう意図の作品なのか、まず第一に分からない(まさか、ブレードのジュヴナイル版では?)。第二に、インベーダーの地球侵略のバターンが、どうにも矛盾だらけ。宇宙人はアンドロメダ星雲(一)からやってきて、若い人間の頭脳が必要だったため——といいながら、裸で鎖につないだり、学校でスバルタ教育をやったり、行動が意味不明である。結末に至って、愛を叫ぶ辺りになると、ちょっとねえ。

こう書いては失礼に当るかもしれない。しかしあえて言わせてもらうなら、作者はあまりSFを御存知ないようだ。だから、題材が借り物だらけは、まあこんなものだろう。ただ、もう少し考えて物語を組み立ててもらいたい。最低限の説得力もないようでは、子供だましにもなるまい。